

# 大津町議会 総務常任委員会行政調査報告

氏名 村山 龍一

視察研修名：大津町議会総務常任委員会行政視察

研 修 先：①宮城県仙台市  
②福島県双葉町  
③茨城県高萩市

期 日：令和7年11月17日（月）～19日（水）

研修テーマ：①仙台空港アクセス線について  
②東日本大震災（当時の状況・避難体制等）について  
③「My Rideのるる」について

## 研修報告 意見・感想

### ・宮城県仙台空港アクセス線行政調査【11月17日（月）】

【出席者】宮城県土木部空港臨空地域課 総括課長補佐 高橋秀行氏、  
主任主査 菅井智弘氏、主事 菅原 豊氏  
仙台空港鉄道㈱ 代表取締役専務 江間仁志氏、  
業務部長 富樫克己氏、総務部次長兼総務課長 難波克彦氏

・仙台空港アクセス鉄道整備の歩みを、宮城県土木部空港臨空地域課総括課長補佐 高橋秀幸氏、仙台空港鉄道株式会社の概要を仙台空港㈱代表取締役専務江間仁志氏が説明される。

（１）アクセス鉄道の必要性（設置の目的）

- ・JR 仙台駅への定期性・速達性の確保  
（バスによる所要時間約 40 分を最短 17 分に短縮）
- ・広域的集客性の確保  
（新幹線等との連絡による東北全域からの利便性向上）
- ・臨空都市整備の誘導に伴う公共交通機関の確保



仙台空港アクセス線乗場



仙台空港アクセス鉄道

## (2) アクセス鉄道事業の概要

- ・【区間】JR 名取駅～仙台空港間（約 7.1 km）
  - ・【構造形式】単線・電化・高架形式
  - ・【駅数】3 駅（杜のせきのした駅、美田園駅、仙台空港駅）
  - ・【運行計画】JR 東北本線 仙台駅まで直通乗り入れ  
運行本数：2～3 本／時間、車両編成：4～2 両編成 44 往復・88 本／日
  - ・【開業月日】H19 年 3 月 18 日（日）
  - ・【利用見込】開業時一日当たり約 10,000 人
  - ・【事業主体】仙台空港鉄道株式会社（第 3 セクター）
  - ・【事業手法】①一般部（6.1 km）は仙台空港株による事業 ニュータウン鉄道等整備事業費補助金
- ②空港敷地内（1.0 km）のインフラ部は空港整備特別会計による国直轄事業、軌道部は仙台空港株による事業
- ・【事業費】331 億円（仙台空港鉄道株事業費 299 億円 関連事業費 32 億円）
  - ・【整備スケジュール】H12 年 4 月 仙台空港株設立、6 月第一種鉄道事業許可取得、9 月工事施工認可（路盤工事）、H14 年 4 月工事施工認可（開業設備）、12 月 仙台空港敷地内路盤工事着手、H18 年度 開業監査、試運転、開業
  - ・【仙台空港鉄道利用者数】3 駅の乗降者数  
H19（2007）2,544,009 人⇒H29（2017）3,653,024 人⇒R6（2024）4,273,172 人
  - ・【仙台空港利用者】H19（2007）3,321,546 人⇒H29（2017）3,438,961 人  
⇒R6（2024）3,778,274 人
  - ・【駅周辺の整備】美田園駅と杜せきのした駅に臨空都市整備を組合施行により土地区画整理事業で行っている。



美田園駅



美田園駅周辺

- ・宮城県仙台市立荒浜小学校行政調査【11月18日(火)】
- ・仙台市立荒浜小学校は震災遺産として一般公開されている。荒浜地区は、仙台市中心部から東に約10km離れた太平洋沿岸部に位置し、明治6(1873)年創立の荒浜小学校は、海岸から約700m内陸に位置し、震災当時は91人の児童が通っていた。
- ・平成23(2011)年3月11日に発生した東日本大震災で、児童や教職員、住民ら320人が避難し、2階まで津波が押し寄せた。津波による犠牲者を再び出さないため、その校舎を震災遺構として公開し、津波の脅威や教訓を後世に伝えている。
- ・校舎1階は、天井まで浸水し、津波は東側から西側へ通り抜け、床には津波によって流された「がれき」が引きずられた跡が残っている。校舎2階には、教室側の壁(床から40cm程度)には、津波が滞留した跡が残っている。



校舎1階（がれきの残骸）



校舎2階（津波の跡）



屋上からの状況



地震発生時刻

・福島県双葉町(ふたばまち)(東日本大震災)行政調査【11月18日(火)】

【出席者】双葉町議会議長 岩本久人氏、副議長 高萩文孝氏、  
双葉町住民生活課長兼郡山支所長 中里俊勝氏、  
議会事務局 局長 石上 崇氏、係長 土屋美香氏

- ・双葉町の現状と課題について、双葉町住民生活課長 中里俊勝氏から説明があった。
- ・平成23(2011)年3月11日の東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所事故により、11年5カ月という長きにわたり全町非難を余儀なくされ、町民の帰還率等が非常に低い状況で、商工業や農業等においても同様に低い傾向であった。
- ・【居住人口】震災前：7,149人2,611世帯 現在：197人144世帯(震災前の約2.8%)
- ・【商工業】震災前：商工会登録数179事業者 現在：37事業者(震災前の約21%)
- ・【農業】震災前の面積：723ha 現在：4ha(震災前の約0.6%)
- ・【居住可能エリア】町内の15% 町内の85%は帰還困難区域
- ・【教育環境】現在はいわき市で仮設の学校を運営。町内の幼稚園、小中学校は未再開。今後、町立学校を再建し、2028年度の開校を目指している。

・茨城県高萩市行政視察【11月19日(水)】

【出席者】高萩市議会議長 寺岡七郎氏、高萩市企画総務部部長 大月隆行氏、  
企画財政課長 酒出貴司氏、主幹 佐藤瑞姫氏、係長 阿部雅史氏、  
議会事務局 局長 二田雅史氏、係長 水戸明宏氏

- ・高萩市企画総務部企画財政課 主幹 佐藤瑞姫氏から呼出型最適経路バス「My Rideのるる」の事業説明を受け、試乗体験を行った。
- ・高萩市は、人口25,027人、面積193.55km<sup>2</sup>で茨城県の北東部に位置し、市域の85%が山林原野であり、市街地である高萩地区と松岡地区に人口の95%が集中している。
- ・【公共交通を取り巻く現状】マイカー利用による公共交通利用者の減少、利用者減少に伴う事業運営圧迫により、路線数や便数の減少、便数の減少に伴う不便さから、利用者数の減少という悪循環に陥っていた。
- ・【公共交通の取り組み】市内路線バス運行への支援、山間地域等へのデマンド型乗り合いタクシー、高速バス運行への支援を行っていた。
- ・【「MyRideのるる」の導入】朝夕は定時定路線バスを運行し、日中は定時定路線バスと呼出型最適経路バス「MyRideのるる」を運行している。「MyRideのるる」とは、人工知能AIを活用し、利用予約に応じて運行する路線バスで、利用者のリクエスト内容に応じて、路線やダイヤ、乗降場所等を最適化して運行するバス。
- ・1乗車 大人300円、小児150円(高齢者や通学者を対象に割引き制度がある)
- ・バス停：237箇所(既存バス停96箇所、仮想バス停141箇所)



既存バス停



仮想バス停



運賃 300 円

- 今回の研修の、宮城県の仙台空港アクセス鉄道整備と仙台空港鉄道は、くまもと空港アクセス鉄道整備に向けての参考となり、美田園駅周辺の土地区画整理事業は、中間駅周辺整備に向けての参考となった。
- 宮城県仙台市の震災遺構の荒浜小学校の視察は津波に対しての普段からの避難訓練の必要性を感じ、福島県双葉町では、福島第一原子力発電所事故により地震からの復興が全く進んでいない状況であった。町の復興をするためのコミュニティの大切さを改めて確認できた。
- 茨城県高萩市の人工知能 AI を活用した路線バスは、今後、乗り合いバスの利便性を向上させて、利用者を増やすためにも必要ではないかと考えられる。